

## エラスムスの聖職者批判（2）

——「アルキビアデスのシレノス」から——

柳 沼 正 広

はじめに

エラスムスの聖職者に対する批判は『痴愚礼讃』*Moriae Encomium*（1511年）における諷刺や揶揄が最もよく知られているが、本稿ではより直接的な表現がみられる『格言集』*Adagiorum Chiliades*に収められている「アルキビアデスのシレノス」を見ていきたいと思う。エラスムスは1515年版の『格言集』に大幅な加筆を行っているが「アルキビアデスのシレノス」の大部分もその時に書かれている。そこには宗教改革前夜のエラスムスの教会への態度を見ることができだろう。さらにそれは彼の人文主義を色濃く反映している。前稿<sup>1)</sup>では、聖職者の息子であり、修道院出身で、神学博士号を持つ司祭といった聖職者としてのエラスムスの姿を見たが、本稿では人文主義者としての姿を追ってみたい。第1節ではエラスムスの初期の作品から彼の人文主義と宗教思想の基本的な考え方をみる。第2節では『格言集』の成立までの、同時代の人文主義者たちとの交流を中心に当時の政治情勢も織り交ぜながらエラスムスの足取りをみていく。第3節で「アルキビアデスのシレノス」の聖職者批判の内容を見る。ここでのシレノスとは酒の神バックスの養育係の老人を象った彫像のことで、外面は醜いけれども内側に美しい神の像を秘めている。プラトンの『饗宴』の中でアルキビアデスがソクラテスを称賛する際にこのシレノスの彫像を喩えとして用いている。エラスムスは、このような由来を持つ格言の解説の中で、聖職者に対する批判を行っているのである。

## 1. エラスムスの基本姿勢—初期の作品から

### 1.1 修道院時代の書簡

ルネサンスの人文主義とは、簡潔には古代ギリシア・ローマの学問への愛好であり、特にフマニタス研究 (studia humanitatis)、つまり文法・修辞・歴史・詩・道徳哲学これら五つの分野に強い関心をもつ人々が、その再興を目指した古典研究・教育運動をいう。この運動を担ったのは、詩人や歴史家、あるいは高等教育機関の古典学教師だけでなく、王侯貴族や都市の秘書や官吏たちだった。彼らは正しくまた美しく書き、話すために古代の偉大な作家たちを模範と仰いだ。そして本物を求めて文献学的手法を発展させる。また彼らはこれらの学問による教育は自分たちの人生に深い洞察を与えてくれると信じ、その道徳的価値を高く評価していた。

エラスムスの修道院時代の書簡を見ると、エラスムスが何を読んでいたかを窺い知ることができる。1489年ごろ書かれたとされる友人コルネリス・ヘラルト宛ての書簡には次のようにある。

詩における私にとっての権威は、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、ユウェナリス、スタティウス、マルティアリス、クラウディアヌス、ペルシウス、ルカヌス、ティブルス、プロペルティウスである。また、散文においてはキケロ、クィンティリアヌス、サルスティウス、テレンティウスである。さらに文体の素晴らしさにおいてはとりわけロレンツォ・ヴァッラに頼っている。知性と記憶力において彼に匹敵する人はいないことを認めざるをえない。私は以上の作家たちによって用いられない言葉遣いはどんなものでも用いるつもりはない。<sup>2)</sup>

またエラスムスは以上に挙げられているロレンツォ・ヴァッラ (Lorenzo Valla 1406-57) のほかに、フランセスコ・フィレルフォ (Francesco Filelfo 1398-1481)、アゴスティノ・ダティ (Agostino Dati 1420-78)、グアリーノ・ダ・グアリーニ

(Guarino de'Guarini 1370-1460)、ポッジオ・ブラッチョリーニ (Poggio Bracciolini 1380-1459)、などのイタリアの人文主義者たちの名も他の書簡<sup>3)</sup>で挙げている。このようにエラスムスは古代ローマの作家やイタリアの人文主義の作品に多く触れることができたと考えられる。また、特に上の引用から分かることは、エラスムスのヴァッラに対する心酔である。他の書簡でも、次のような箇所が見られる。

強烈な勤勉と努力と活動をもって、野蛮な人々の愚かさや戦い、埋もれかかっていた文学を消滅から救い、イタリアにその古代文学の栄光を取り戻し、そのうえ学者たちに、これから先はもっと注意して自分の考えを表現するように忠告してくれたヴァッラ・・・<sup>4)</sup>

## 1.2 『反蛮族論』 *Antibarbarorum liber*

このようなヴァッラなどのイタリアの人文主義の影響を受けながらエラスムスが著したのが『反蛮族論』である。この作品は古典学芸を愛する者たちの敵に対する論駁である。蛮族とは、美しい古典ラテン語を理解せず、古代の文学を異教のものとして退ける修士や教師たちを指している。異教徒による文学をどのように読むかということは人文主義者にとって大きなテーマであり、エラスムスも古典文学研究の擁護を行っている。この作品が出版されたのは1520年であるが、そのとき序文として寄せた書簡<sup>5)</sup>の中で、書き始めたときまだ二十歳に達していなかったとエラスムスは述べている。修道院に入るところの1480年代後半と考えられる。エラスムスはもともとの演説形式のものを対話編に書きかえており、この『反蛮族論』の成立にはいくつかの段階があるが、残されている最も古いテキストでも1501年かその翌年に成立したものと考えられている<sup>6)</sup>。しかしながら、対話編の中に残されている一人の話者の演説部分から最初の演説の内容をうかがい知ることができると考えられており<sup>7)</sup>、そこから20代の若きエラスムスの考え方を推し量ることができるだろう。

その演説から主な論点のうちの一つを挙げると、一つは学ばないことを信仰

の純真さに結び付けるのは間違いであるということ、もう一つは、異教徒によるという理由だけで認めないのは馬鹿げているということである。

彼らは我々の前に使徒たちの純真な素朴さを (*simplicem rusticitatem*) 掲げてくるだろう。彼らは、見せびらかしや驕りのために作られた異教の教えを信仰のために侮蔑できる人間には、天国において特別な報奨があると言う。さらに彼らは、無知による敬虔こそ最も天国で喜ばれるものだと言う、まるで天国が我々に無学であることを望んでいるかのように。もしそうなら我々はなぜ何よりも愚かさを大切にしないのだろうか？また彼らは、無知が人生のあらゆる局面において役に立つものであるかのように言う。また、手に入れたこともない、そして持とうとも思わない素晴らしいものを何よりも軽蔑するというのは全く愚かなことで狂気の証である。彼らがあらゆるものに対する侮蔑が自分たちの賞讃になると考えようとしているなら、大変な誤りを犯している。<sup>8)</sup>

つまり古典文学の敵たちは、キリストの使徒たちの素朴さと純真さを信仰の模範として、文学などは必要ないと主張していた。これに対して、エラスムスは学識と敬虔さを備えた人物としてヒエロニムスやアウグスティヌスなどの教父たちを挙げ、また文学そのものが信仰を妨げるものではなく、もし文学を悪用する者を見たら学問を捨てさせるのではなく、誤った用い方へ向けさせないように忠告せよ<sup>9)</sup>、とあくまで読む人間の側の問題としている。

エラスムスは、異教徒によって見いだされたものを用いてはならないのであったら、キリスト教徒は日常生活を営むことさえできなくなってしまう、と大工道具や製鉄、製陶、織物などを持ち出し、文学だけでなく生活全般にわたって異教文化の恩恵があることを論じる。そして異教の文化の中で有用なものを選んで活用することを勧めるのである。

彼らも、異教徒の創造したものの中に (*in rebus ab ethnicis inuentis*) 何か区別を

設けるべきことを理解するだろう。あるものは役に立たず、疑わしく、不健全であり、一方で、全く有用で、健全で、必要でさえあるものがある。悪いものは異教徒に返し、良いものは私たちのために活用しよう。これこそ思慮深く熱心なキリスト教徒にふさわしいことである。<sup>10)</sup>

そして異教の世界もすべてキリストの生誕のために準備されたものであると述べる。

彼(イエス)は、自らが生まれると決めた黄金時代に、それ以前とそれ以後のすべての時代が従うことを望んだのである。そして、自然に存在する全てのものが、その時代の幸福と栄光を増進するために呼び戻されることを喜ぶのである。彼自身がそのことがなされることを約束している。彼は「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せる」<sup>11)</sup>と言っている。ここで彼がいみじくも「引き寄せる」という言葉を使ったのは、すべてのもの、敵意あるものも、異教のものも(ethnica)、彼から遠く離れたものでも、従おうとしなくても、自身の意志に反しても、キリストに仕えるために引き寄せられるに違いないと考えることが出来るようにするためだと思われる。<sup>12)</sup>

このような異教の文学の古典に対するエラスムスの基本姿勢は、アウグスティヌスの『キリスト教の教え』に説かれる享受と使用(frui-uti)の概念の継承であるとも考えられているが<sup>13)</sup>、積極的に古代の文化を生かそうとする人文主義の姿勢が、古代ギリシア由来の格言の解説をとりながら、キリスト教聖職者に対する批判を展開するエラスムスにもよく表れているといえるだろう。

### 1.3 『エンキリディオン』 *Enchiridion militis christiani* (1504年)

もう一つエラスムスの基本的な考えを知るために『エンキリディオン』を見ておこう。エンキリディオンという言葉には、「手引き」あるいは「短剣」とい

った意味がある。この著作の題は「キリスト教戦士の手引き」「キリスト教戦士の武器」といったところだろう。本稿では単に『エンキリディオ』と呼ぶことにする。エラスムスは1501年、トゥルヌエムにいたとき、夫にみだらな生活を止めさせたいと願うある女性に要請されてこの作品を書いた。『エンキリディオ』は、『痴愚礼讃』などの他の著作と違って、全体を通して真剣な調子で書かれている。また、論理的に整然と、体系として自分の神学思想を述べようとしているのでもない。エラスムスはこの著作で、執筆のきっかけからも分かるように、キリスト教徒としての生き方を示そうとしている。

まず、キリスト教徒の生活は、悪魔とこの世の誘惑に対する不断の闘争であるとし、その戦いのためにキリスト教徒には、2つの武器が必要とされる。それは祈りと知識である。これらの武器は、聖書を真剣に学ぶことから得られる。これらの武器をたずさえて、戦に赴くとき最も重要なことは自分自身を知ることであるとし、エラスムスは、プラトン、オリゲネス、そして聖書から、彼の人間理解を示す。それは人間は霊的世界と肉的世界の両方に関わる存在であるというものである。この理解に基づいて、『エンキリディオ』の後半部では、実践についての22の教則を挙げている。その中で最も重要と思われるのが、目に見えるものから、信仰の本質である目に見えないものへ心を向けるように教えている第五の教則と、キリストを信仰の唯一の模範として仰ぐように説く第六の教則である。

第五の教則は、内面的信仰の強調といえるだろう。エラスムスは人々がキリストや聖者の遺物とされる物を崇拜しそれらに触れることを望みながら、聖者たちがどのような生涯を送ったかを忘れてっていると戒めている。教会の目に見える形ある儀式は補助的なものとして、特に幼い者にとって重要であることを認めながら、次のように述べる。

しかし、可視的なもののために可視的な事物によってキリストを礼拝すること (Christum visibilibus rebus ob visibilia colere)、宗教的敬虔の極致を可視的なものに置くこと、ここで自分に満足し他の人々を非とすること、可視的なものに

驚嘆ししかもその上に寄りかかって死ぬこと、もう一度言うとキリストへと導いて行くためにのみ取り扱われるべきであるこれら可視的なもの自体によってキリストからそらされること、このことは霊的である福音の律法からももちろん遠ざかって、ある種のユダヤ主義に逆戻りすることを意味し、このような迷信をもたないで心より大きなあらわな悪徳に苦しむことよりも恐らくもっと危険なことでしょう。この病いのほうが確かに致命的ではありますが、そうであっても先のもののほうがいっそう癒しがたいものなのです。<sup>14)</sup>

また、この第五の教則のところでは聖書解釈についてもかなり論じられているが、その趣旨は行為と同様に目に見える文字にとどまらず、アレゴリー的な理解を得なければならないというものである。ここでもエラスムスは「アルキビアデスのシレノス」を持ち出して、表面的理解つまり字義通りの解釈と比較的理解の対照を強調している<sup>15)</sup>。

第六の教則はキリストを信仰の唯一の模範とすることを説いているが、これはエラスムスが育った低地地方の「新しき敬虔」Devotio Modernaが生んだトマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』との類縁性を強く思わせる。「新しき敬虔」のエラスムスに対する影響がどれほどのものであるかを知るのには難しいことは前稿<sup>16)</sup>で触れたが、『キリストにならいて』は修道士のために書かれたものであり、『エンキリディオン』は世俗の中で生きるキリスト教徒のために書かれたものである。またエラスムスは『エンキリディオン』の中で、修道生活は敬虔ではなく各人の資質に応じて有益にも無益にもなる生活の仕方であると述べている<sup>17)</sup>。このような視点から、稿を改めてエラスムスの修道士に対する考え方を見ていく中で「新しき敬虔」についても考察できればと思う。

『エンキリディオン』を読んでわかることは、エラスムスが、信仰とは目に見えるものから離れて目に見えない霊的なものへと向かう内面的なものであり、聖書に説かれるキリストを唯一の模範として生きることであって、儀式はその補助に過ぎず、逆に形式主義に陥れば信仰の妨げにしかならないと考えていたことである。エラスムスの聖職者批判の主眼点はこの信仰の形骸化にある。「ア

ルキビアデスのシレノス」の解説の中で糾弾されているのもこのことであるといえるだろう。

## 2. 「アルキビアデスのシレノス」執筆の背景<sup>18)</sup>

### 2.1 『格言集』 *Adagiorum Chiliades*の成立

エラスムスの『格言集』の初版は、1500年6月にパリのジャン・フィリップ書店から出版された。エラスムスの生年を1466年とすれば34歳の頃で、それまで自らのラテン語の文に磨きをかけるために、ギリシアとローマの古典を研究しながら収集した818の格言・名句が収められていた。それらはウェルギリウス、テレンティウス、キケロ、プリニウス、クインティリアヌス、ヒエロニムス、アウグスティヌスなどからのものであり、ギリシア語のものも154含まれていた。それぞれ格言にはエラスムスによる簡単な解説が付されており、彼の人文主義者としての初の業績となった。エラスムスは生涯この『格言集』の増補改訂を行い、生前最後の1536年の版では格言総数は4151に上った。

大きな転機が二度あったといえる。まず、1508年9月にヴェネツィアのアルドゥス書店から出した第3版である。エラスムスは1506年からヘンリー七世の侍医の二人の息子の家庭教師としてイタリアを訪れており、1508年1月にはアルドゥス・マヌティウス(1450-1515)のもとに滞在することになる。アルドゥスは当時最も有名な印刷業者で、厳密な校訂と優れたギリシア語の活字で知られていた。またアルドゥス自身もローマ大学・フェッラーラ大学に学んだ人文主義者であり、また彼のもとには亡命ギリシア人のヨアンネス・ラスカリス(1445-1535)などの学者がいて、エラスムスは彼らの協力を得ながらアルドゥスの所蔵する豊富な文献を用いて『格言集』の増補改訂を行うことができた。1506年末にパリのジョス・バード書店から出された第2版で新たに加えられた格言はわずかに20ほどであったが、第3版では格言総数は3260にもなり、名称も*Adagiorum collectanea*から*Adagiorum chiliades*と改めた(単に「格言集」との呼称から「何千もの格言」の意に)。そしてエラスムスが格言・諺について論じた長文の序やアルファベット順とテーマ別の二つの便利な索引が備えられた。またギ



ロシア語の格言も圧倒的に増え、それにはエラスムスによる訳が付されている。それぞれの格言についてもより詳しくその由来や様々な作家の使い方の違いを解説し、ときには格言の解説をこえて当時の学問への批評などを展開している。この『格言集』第3版は大成功をおさめ、エラスムスはヨーロッパ中にその名を知られることになる。

二度目の大きな変化は1515年のフローベン書店版である。ヨハン・フローベン(c.1460-1527)はアルドゥスに劣らぬ技術を持ったパーゼルの印刷業者で、エラスムスとは1516年の『校訂ギリシア語新約聖書』や『聖ヒエロニムス全集』などでも一緒に仕事をするようになる。この1515年版からエラスムスは格言の解説の中に痛烈な社会批判を盛り込むようになる。無益な戦争や聖職者の腐敗、君主の圧政や、聖書を学ぶのにギリシア語を学ぼうとしない神学者などが批判の対象である。のちに別に冊子としてたびたび印刷されることにもなる「戦争は体験しない者には快い」*Dulce bellum inexperitis*もこの時に書かれている。

## 2.2 人文主義者エラスムス—1499年から1515年まで

エラスムスは、『格言集』に取り組むきっかけとして、ウィリアム・マウントジョイ卿の名を挙げている<sup>19)</sup>。エラスムスは、1495年からパリで学んでいたが、1499年に家庭教師として教えていたマウントジョイ卿の招待でイギリスへ渡った。マウントジョイ卿はエラスムスを学識ある名士として上流階級の人間たちに紹介した。まだ少年だったヘンリー八世にも会っている。しかし、最も重要なのは、ジョン・コレットやトマス・モアといったイギリスの人文主義者たちとの生涯続く交友が始まったことだろう。

コレットはイタリア留学から帰った1496年、オクスフォードで新約聖書のパウロ書簡の講義を始めた。コレットのこの講義<sup>20)</sup>は、ペトルス・アベラルドゥス(1079-1142)以来のスコラ主義の弁証学的方法を用いず、イタリア人文主義の影響を受けたものだった。彼は、スコラ学のように聖書を論理的意味を引き出して矛盾のない教義の体系を作り上げるための命題の集積と見るのではなく、執筆者パウロの意図や読み手がどのような人たちであったかなどに関心を向け、

キリスト教徒の生き方の規範を引き出そうとしていた。彼が引用するのはスコラ学者ではなく、アウグスティヌスやヒエロニムスといった古代の教父たちであった。パリのスコラ神学に嫌気がさしていたエラスムスは、この講義を聴いて強い共感をおぼえたようである。エラスムスはコレットへの書簡の中で、当時の神学者たちを批判しながら、賛辞を送っている<sup>21)</sup>。

しかしエラスムスはコレットの方法で十分とは思っていなかったようだ。なぜならコレットはウルガタ聖書を用いており、つまり翻訳によっていたのだった。コレットはおそらくエラスムスに自分と同じようにオクスフォードで講義することを勧めているが、エラスムスは力不足を理由に辞退している<sup>22)</sup>。これはエラスムスがまだギリシア語を習得しておらず、原典から新約聖書や古代教父の著作を十分に扱うことができないことを意識していたためと考えられる。コレットはギリシア語を習得していなかった。彼が聖書研究におけるギリシア語の重要性を感じるのは1516年にエラスムスがギリシア語新約聖書を発刊してからで<sup>23)</sup>、そのとき「今ではギリシア語を学ばなかったことを残念に思います。その知識がなければ私たちは無力です<sup>24)</sup>」と後悔している。

また、このイングランド初訪問におけるウィリアム・グローシン (William Grocyen 1440s-1519) やトマス・リナカー (Thomas Linacre c.1460-1524) といったギリシア語にすぐれた学者との交流も見逃せない。彼らはフィレンツェで亡命ギリシア人学者のデメトリウス・カルコンデュラス (Demetrius Chalcondyles 1423-1511) やイタリアの人文主義者ポリツィアーノ (Poliziano 1454-94) のもとでギリシア語を学んでいる。彼らとの交流がエラスムスにギリシア語未習得による知識不足を痛感させたとも考えられる。エラスムスはこのイングランド訪問後、ギリシア語を猛烈な勢いで学び始める。このことは、1500年に友人に宛てた書簡<sup>25)</sup> からうかがうことができる。この訪問はエラスムスの人文主義者としての道を大きく開くものだったことは間違いない。訪問後の1500年にエラスムスは『格言集』初版をマウントジョイ卿に捧げている。

1502年の秋にはエラスムスはルーヴァンに身を寄せていた。その大学の神学部教授で後に教皇ハドリアヌス六世となるアドリアン・フロリゾーンの歓迎を

受けている。エラスムスはフィリップ大公がスペインから低地地方に帰還する際の記念の式典のための頌詞を作る機会を与えられ、それは1504年1月ブリュッセルの大公の宮殿で読み上げられた。それはすぐに手直しを加えたもの『頌詞』(Panegyricus)が、デイルク・マールテンス書店から出版された。またエラスムスにとってはじめての大きな宗教的著作の出版となる『エンキリディオ』が、他のいくつかの作品とともに『蛍雪余論』(Lucubratiunculæ aliquot)に収められ、2月にこれもデイルク・マールテンス書店から出版された。1504年中にエラスムスの評判は高まり、フィリップ大公に宮廷の一員として招かれるまでになった。しかしエラスムスはこれを辞退し、冬にはルーヴァンを去ることになる。エラスムスは1504年の6月に、ルーヴァン近郊のプレモントレ会デュ・パルク修道院で、ロレンツォ・ヴァッラによる新約聖書のウルガタ訳とギリシア語写本を校合した『新約聖書校註』(Collatio Novi Testamenti)の写本を偶然発見する。翌年の4月にはパリのジョス・バード書店からこの注解の翻刻版を出版している。

1506年6月、イングランドにいたエラスムスは、ヘンリー七世の侍医であるジャンバチスタ・ボエリオの二人の息子のイタリア遊学に家庭教師として同行することになった。このころのイタリアは、フランスの侵攻や各都市間の争いなどで戦乱の中にあった。エラスムスは9月にトリノに着くと、前稿で述べたように短期間のうちに神学博士の学位を受ける。ミラノを経て10月半ばにはポローニャへ赴いたが、教皇ユリウス二世がフランスと組んで、教皇権に従わないポローニャを討つため軍隊を率いてきたため、大学は閉鎖となり、エラスムスはフィレンツェへと逃れた。このときユリウスは無血入城を果たし、エラスムスもすぐに戻ることができたが、古代の学芸にあこがれてイタリアにやってきたエラスムスは、教皇の軍隊なるものに遭遇したのだった。

1507年秋、ボエリオ家との契約が切れるのを控えていたころ、エラスムスは出版業者アルドゥス・マヌティウスへ書簡とエウリピデスの翻訳を送った。そして、アルドゥスの招待を受けヴェネツィアへ赴く。そしてここで前述のような『格言集』の大幅な改訂を行い、1508年9月に上梓した。ここでのギリシア

人学者たちとの交流でエラスムスは、ギリシア古典の学識を大いに深めた。この間にもドイツ皇帝マクシミリアン一世がイタリア半島からフランス軍を締め出すために軍を差し向け、同盟を拒否したヴェネツィアに攻撃を仕掛けてきている。マクシミリアン一世とフランス王ルイ十二世は、この年の12月には、トルコ征伐を名目に和平を結ぶが、これは教皇ユリウス二世らとも同盟してヴェネツィアを倒すことを狙うものだった。この頃エラスムスはパドヴァにあってスコットランド王ジェームズ四世の庶子アレクサンダー・スチュワートを監督・教育していたが、戦乱を避けるためにフェラーラへと移っている。教皇ユリウス二世は1509年4月にヴェネツィアを破門したが、フランス軍がヴェネツィア軍を破りイタリア半島における勢力を拡大してくると1510年2月には赦免し、翌1511年10月にはそのヴェネツィアとフランスに対抗するための神聖同盟を結んだ。

1509年の春からエラスムスはローマにあったが、そこで数ヶ月間を過ごし、ローマ教皇庁の腐敗した姿をつぶさに知ったようである。聖職売買や枢機卿の豪華な衣装や暮らしぶりなどは、「アルキビアデスのシレノス」にも描かれる。5月にヘンリー八世が即位するとマウントジョイ卿が、エラスムスにイングランドへ来るように勧めてきた。ヘンリー八世は学芸を理解する君主であり、手厚い庇護を与えてくれるはずだというのだった。エラスムスは、教皇庁における役職などを約束して彼を引きとめようとする友人を振り切って、イングランドに赴いた。しかし、期待したような庇護はなかった。けれども、エラスムスが彼の著作の中で最も有名になる『痴愚礼讃』の草稿を書き上げたのは、このイングランド訪問でトマス・モアの家滞在していたときだとエラスムス自身が述べている<sup>26)</sup>。エラスムスは序文の中で、社会のさまざまな人々を諷刺したこの傑作をイタリアからの道中で考え、またMoria（ギリシア語で「愚かさ」ΜΟΡΙΑ）という言葉、Morus（モアのラテン語名）から連想したとして、友情の記念にモアにささげるとしている。

この『痴愚礼讃』のアイデアの下地には、ギリシアの風刺作家ルキアノスがあると考えられている。1505年にエラスムスがモアの家滞在していたとき、

二人でルキアノスの作品の幾つかをラテン語に訳して、1506年にパリのジョス・バード書店から『ルキアノス小品集』(*Luciani opuscula ab Erasmo Roterodamo et Thoma Moro traducta*)として出している。『痴愚礼讃』は1511年6月にパリのジル・ゲールモン書店から上梓され、大成功を取めた。ところがここでもまた戦争がおこる。ヘンリー八世が、1511年の11月にはユリウス二世の招きに応じて、反フランスの神聖同盟に参加し、翌1512年6月にはフランスに宣戦布告した。このときフランスは、スコットランドと軍事同盟を結び、イタリア半島から軍を撤退させた。1513年9月にはスコットランドがイングランドに攻撃を仕掛けたが大敗し、この戦いでジェームズ四世とともにエラスムスの愛弟子アレクサンダー・スチュワートが戦死している。

エラスムスは1511年からの3年間は、友人である司教ジョン・フィッシャーの招きに応じてケンブリッジに滞在してギリシア語を教えた。ここでエラスムスは、ヒエロニムスの著作の校訂と新約聖書の校訂・注解に取り組んだが、『格言集』の増補やギリシア・ローマの古典の校訂や翻訳なども行っていた。そして1514年7月それらを出版するためにバーゼルへ向かう。バーゼルでは、ヨハン・フローベンが待っていた。フローベン書店は、前年の1513年8月に無断で『格言集』を出版していたが、エラスムスはその活字体のすばらしさにしぶしぶそれを認め、そして、1515年2月にはさらに増補加筆された『格言集』がフローベン書店から出版されることになる。

エラスムスはイングランドやイタリアで人文主義者やギリシア人学者と交流して自らの研究を深めその成果を生みだしてゆくが、当時の世の中は戦争による混迷を深めるばかりであった。教会の指導者である教皇ユリウス二世(1513年2月没)はそのような事態を改善するどころか、みずから軍を率いて戦争を遂行していた。エラスムスは1515年版の『格言集』の「戦争は体験しない者には快い」に思いの一端を結実させるが、「アルキビアデスのシレノス」にも戦争への憎しみを滲ませている。

### 3. 「アルキビアデスのシレノス」にみられる聖職者批判

#### 3.1 「アルキビアデスのシレノス」概要

この格言「アルキビアデスのシレノス」の解説は、1508年版の『格言集』においては短く簡潔なものであった。この言葉が、表面を一見しただけではほとんど無価値で滑稽に見えるがその内側をよく見てみると称賛に値するようなものに使われること、ここでいうシレノスとは小さな木の彫像であり、分けて開かれるようにできていて、閉じているときは醜い笛吹きの像であるが、開くと思いかげず中に神の像が現れること、そしてプラトンの『饗宴』の中でアルキビアデスが、外見と内面の甚だ異なるソクラテスを称賛するために喩として持ち出したこと<sup>27)</sup>を紹介するのみであった<sup>28)</sup>。

しかし、1515年版の『格言集』では大幅に加筆が行われ、一つの長文のエッセイとなった。この言葉の用法や由来の説明の後に、外見は醜いけれども内面の美しいシレノスとしてソクラテスが生き生きと描かれる。

しかしこのあまりに滑稽なシレノスを開いたならば、あなたははっきりと見出すことだろう。人間というよりも神を、偉大で高邁なる精神を、そして真の哲学者を。他の人々が地を駆け回り、海を渡り、汗を流し、言い争い、戦争を起こしてまで求めようとするあらゆるものを蔑み、どのような侮辱をも超越し、財産をもって彼を動かすことも全くできない。そして彼は何ものをも恐れない。全ての人が恐れる死さえも蔑んでいた。<sup>29)</sup>

そのほか幾人かの古代の哲学者の名があげられた後に、「このように語ることが許されるのであれば<sup>30)</sup>」と、キリストがソクラテスと同じほどの分量で、より鮮やかにその生涯の悲惨な側面と彼によってもたらされた栄光の対照をもって描き出されている。キリストは外見上みすぼらしく、弟子たちも少なく貧しかったし、あらゆる快樂とは無縁で、飢えと疲労の中で、人々の非難と嘲りの対象となり、最期は十字架の上であったが、その死によって人々を救ったのだ

と。さらに預言者、洗礼者ヨハネ、そしてキリストの使徒たちもまたそのようなシレノスであったとされる。

そしてエラスムスは自分たちの時代に目を向け、このようなシレノスは今では本当に少なくなってしまう、逆に、外面だけ立派で中身が貧しい“裏返しのシレノス”が多くあらわれていると嘆いている。この“裏返しのシレノス”として、一般大衆や、君主とその側近、神学者や修道士も挙げられているが、最も多くの批判がなされているのが、教皇・司教・司祭なのである。

### 3.2 聖職者に対する批判

エラスムスは様々な“裏返しのシレノス”を描いて行く前に、あらゆることにおいて素晴らしい部分は目に見えにくいものであると述べて、いくつか例を挙げている。植物における種、動物における呼吸、大地に眠る金や宝石などである。そこでエラスムスは教会の秘跡にも触れている。ただ水や塩や油を見、ただ言葉を聞くだけで、天上からの力を聞くことも見ることもないのであれば、シレノスの外側を見ているにすぎないと。また聖書も同じであるとして表面上の意味だけでなくアレゴリー的理解を得なければ、その真意を汲み取ることはできない。これは『エンキリディオン』での主張と同じである。

さてエラスムスは、色々な立派な名前を持つ君主が、実際には専制君主で人々を苦しめていると述べた後で次のように言っている。

剃られた脳天を見たら、あなたは司祭として敬うだろうが、そのシレノスの中を見てみたら、俗人よりもひどいということがある。おそらく司教たちの中にも、あなたがその荘厳な聖別式を眺め、新しい衣装、宝石や金で輝く司教冠、同じく宝石で飾られた司教杖、つまりそのまったく頭のてっぺんから足の爪先まで神秘的な完全装備を見たなら、たしかに天上の誰か、また人間以上の人ではないかと期待してしまうような人が幾人かいるだろう。しかしそのシレノスを裏返してみると、戦士、商人、さらには専制君主以外は何も見いだせないということが時々ある。そしてその時になれば、あなたはそ



(152)

の壮麗な装いはすべてお芝居にしか過ぎないと判断するだろう。<sup>31)</sup>

エラスムスは、この格言「アルキビアデスのシレノス」の解説の中で聖職者に対する批判を秩序立てて述べているとは思われないが、上の引用で、エラスムスは聖職者の内実として戦士 (bellator)、商人 (negotiator)、専制君主 (tyrannus) を見ている。この三つは言いかえれば、戦争、教会の富、そして時に司教が大諸侯であるような聖職者が世俗的な意味でも支配者であることを意味していると思われる。この三つに焦点を当てながら、以下に彼の聖職者批判を見ていきたいと思う。まず教会の富についての批判から。

司祭たちの財布からわずかばかりの金を騙し取ろうとする者たちには、教会の敵、あるいはほとんど異端者だと呼ばれて、あらゆる雷が落とされる。詐欺の味方はしないし、誰もそう思わないだろうけれども、もし教会の敵を憎むことが役に立つのだったら、言わせてもらおうと、信仰心のない教皇ほど破壊的で致命的な教会の敵がありうるだろうか。司祭たちの土地や財産がいくらかでも減ると、いたるところでキリストの教会が抑圧されていると叫ばれる。世界が戦争に向かおうとしているとき、司祭たちのあからさまにひどい生活態度が、多くの魂を破滅に引きずり込もうとしているとき、教会の命運を嘆く者はいない。教会が本当に危機に瀕しているにもかかわらず。教会が飾られて誉あると言われるのは、人々の間に敬虔な心が広まった時や過ちが減り優れた徳が増した時、また聖なる学問が盛んになる時ではなく、祭壇が金や宝石で光り、いやこれらさえも見向きもされず、土地、召使、贅沢品、駱駝、馬、まるで宮殿のような金のかかった建造物、その他の人生の空騒ぎなどが、司祭たちを州総督 (satrapas) 並みにしたときである。ここでは聖職録を罪深い目的に費やして一般の人々に大きな怒りを引き起こしている者たちには言及しないでおこう。<sup>32)</sup>

ここに描かれているのは、司牧つまり信者の魂の世話をなおざりにして、金



を集めて財産を守り贅沢に暮らす聖職者たちの姿である。ほかの個所でも「教会から何かを持ち出すことは、償うことのできない売聖であるとされているが、神の生きた宮とされる貧しい人々や寡婦などから略奪したり騙し取ったりして彼らを苦しめることは軽い罪と考えているのだろうか。<sup>33)</sup>」と述べて聖職者たちの顛倒を嘆いている。

続いて戦争についての批判を見よう。

もし誰かが、司祭たちの支配力や財産を守り増やすために武器を取り、戦争の嵐によって聖なるものと俗なものを混ぜ合わせようとする、それは最高の信仰だといわれる。しかし司祭の財産などまったく些細なことではないか。戦争になった時、すべての信仰にもたらされる甚大な被害に比べれば。あらゆる悪のうちで、戦争が引き起こすことのないものなど何かあるだろうか。<sup>34)</sup>

エラスムスは司教に対しては、世俗の富や戦争に煩わされずに、キリストの花嫁である信者をこそこの世の汚れから守ってほしいと願い、「何よりも教皇には勝利してほしいけれども、それは呪われたマリウスや不義のカエサルが勝ち取ったような血塗られた勝利でない<sup>35)</sup>」また「教皇たちにはきわめて好戦的であって欲しい。しかしそれは教会の敵に対してであって、聖職売買、驕り、肉欲、野心、怒り、不信に対してである。これらこそキリスト教徒によって常に警戒され、常に攻撃されるべきトルコ人なのだ。このような戦争に向かってこそ、司教は将軍となり奨励者となってほしい<sup>36)</sup>」と述べる。エラスムスが教皇ユリウス二世の軍隊に遭遇したことは前節でふれた。エラスムスはこのような戦争を行う聖職者に対して新約聖書からパウロ書簡(第2コリントス第11章23-29、第6章4-10)を引用する<sup>37)</sup>。そこには教会のために、投獄、鞭打ち、難破、盗賊などさまざまな苦難に耐えるパウロの姿がある。エラスムスはこの使徒を「アレクサンダー大王よりもはるかに輝かしい戦士であり将軍である<sup>38)</sup>」と称えている。

続いて聖職者が世俗的な支配者であることへの批判を見ていくが、戦争への批判が富の問題と深く結びついていたようにこの“専制君主”の問題も富、戦争と深く結び付いている。

キリストは自身の王国を持っており、それはあまりに素晴らしく異教の王国、より正確にいえば専制国家などによって汚されるべきものではなく、それ自身の輝き、それ自身の富、それ自身の喜びを備えている。しかしなぜ私たちは、互いに相容れないこれらを混ぜ合わせてしまうのか？なぜ地上のものを天上のものに、なぜ最低のものを最高のものに、なぜ異教のもの (ethnica) をキリスト教に、なぜ俗なものを聖なるものに注ぎ込もうとするのだろうか？・・・ [中略] ・・・ 司教冠と兜、祭服と戦士の胸当て、祝聖と大砲、慈悲深い羊飼いと武装した盗賊、司祭職と戦争、どうしてこれらが結びつくのか？天の王国への鍵を持つ人がどうして都市を武器で破壊するのか？人々に平和に満ちた挨拶をする人にとって、どうして戦争を起こすことがふさわしいだろうか？自身の地位をすべて財産で築いた人が、どんな口ぶりでキリストの信者に富は蔑むべきものであると教えるのか？キリストが教え、範を示したこと、使徒たちが何度も強調したこと、つまり悪に手向かわないこと、しかし悪人の悪行に対しては善を持って凌駕すること、傷つけられても親切をもって報いること、敵は善行によって圧倒すること、これらのことを、小さな都市の支配権や塩による財源のために世界を戦争の嵐で混乱に陥れる人が、いったいどんな顔をして教えるというのか？まったくこの世の王国に埋没している人が、キリストが自身の教会をそう呼んでいる天の王国において指導者であることが、どのようにしてできるだろうか？<sup>39)</sup>

エラスムスはさらに軍隊の編成、条約の締結や破棄、臣下への配慮や敵の監視、城塞の補強や使節の派遣など、国を運営することに費やされる労力の大きさを強調し、これらに煩わされているは、祈りの中で神と対話し、聖書を学んで福音を伝えるなどの使徒の責務を果たせることなどできないという。そして

「ヘラクレスが二つの化け物を同時に相手にしなかったように、一人の人間が、二つのきわめて困難な分野を取り仕切ることに適していることなどほとんどあり得ない。よき君主たることはあらゆることのうちで最も難しい。しかし、よき司祭を務めるのは、はるかに洗練されたもっと難しいことなのである。どうやってこの両方を？<sup>40)</sup>」と述べ、聖職者が世俗の支配者となることは不可能であると主張している。

また、エラスムスは聖職者による国の運営がうまくいかない原因として後継の問題を指摘し、二つの理由を挙げている。一つは世俗の君主は自らの子供に国を託すことが多くそのために国を繁栄させようと努力するが、聖職者の場合は、老いてからその地位につくことが多く、略奪した戦利品のように国を扱うこと。もう一つは、世俗の君主の後継者は父からその資質を受け継ぎ、教育も受けるので、世代交代による変化が小さく人々も従って行きやすいが、聖職者の場合は、突然に全くの別人が支配者となって、周囲が大きな変化をこうむることである<sup>41)</sup>。こうしてエラスムスは聖職者が世俗の領域に関わることには無理があるとして、「世俗のことは世俗の人にまかせよ<sup>42)</sup>」と説いている。

### 3.3 聖職者のあるべき姿

もちろんエラスムスは聖職者のあるべき姿についても随所で述べている。端的な表現としては「キリスト教世界が彼に期待しているのは、聖なる教えの糧であり、癒しの助言であり、慈父の慰めであり、生きるための模範である<sup>43)</sup>」とある。聖書を学んでそれに基づいて、信者たちの魂の世話をし、みずからその手本となれ、ということだろう。また聖職者の立場については、次のように述べている。

しかし同様に、司祭、司教、そして教皇のことを教会と呼んでいるけれども、本当はこれらは、教会の召使 (ministri) にすぎない。逆に教会とはキリスト自身がより偉い者と呼んだキリスト教徒の人々であり、司教は食卓に着くその人々に仕えるべきなのである。しかしそうして低い立場に甘んじながら、

(156)

実はもう一つの見方からは、つまり、あらゆることにおいて君主であり、すべてのものの主人でありながら、主人ではなく召使の役割を担ったキリストの仕事を受け継ぎ、その徳と生き方に倣うなら、司教はより偉大なのである。<sup>44)</sup>

これは福音書（ルカ第22章11-27）を踏まえたもので、聖職にあるものは人々を支配するのではなく、人々に奉仕するべきだということだろう。これは、よく知られているパウル・ヴォルツ宛書簡（1518年刊）でエラスムスが示した、「キリストを中心とした三つの環」の見方とは向きが違って興味深い。ヴォルツ宛書簡では、キリストを中心とした同心円の環があり、キリストの最も近くに司祭、司教、枢機卿、教皇の聖職者の環があり、そのまわりに世俗の君主たち、そして君主たちのまわりには一般大衆が置かれていて、聖職者の責任の重大さを説いている<sup>45)</sup>。こちらのほうがより現実に即した見方であり、この『格言集』（1515年版）からの上の引用はあまりに理想的にみえる。というよりもこの「アルキピアデスのシレノス」における聖職者批判は、聖書に説かれる使徒的理想と聖職者たちの現実が、あまりにもかけ離れている様を、見かけが醜くとも内面に神々しいものを秘めているシレノスの裏返しとして描き出すところにその真意があり、そこにエラスムスの人文主義者としての本領が発揮されているというべきだろう。『痴愚礼讃』において、痴愚の女神が自らを讃えるという形で人間の愚かさを諷刺したのと同様である。

エラスムス自身も自分が持ち出している使徒的理想が実現しがたいことをよく心得ている。「司祭たちから、権力や尊厳、栄光、富を取り上げて、使徒たちの頭陀袋と杖を取り戻させようとしなないのかだつて。いい話だ。しかし私は取り上げるのではなく、より優れたもので豊かにし、持つことをやめさせるのではなく、より善きものへと向かわせたい<sup>46)</sup>」また他の場所でも同じように、

これらのことは、司祭たちから権力や富によって手に入れたものは何でも没収すべきだと考えているからではなく、自身の偉大さに気づいて思い出してほしいからである。そのような低俗なものは、異教的なものはいうまでも

なく、自ら拒むか、より低き者たちに譲り、あるいは蔑みながら所有し、パウロ(第一コリントス第七章29-30)にしたがって持っていないかの様に持つてほしい。<sup>47)</sup>

これらは、エラスムスの聖職者に求める改革についての基本的態度を示していると思われる。この最後の引用部分のはじめの文の間に、エラスムスは1528年版で「騒乱は敬虔な者には受け入れられるべきではないから<sup>48)</sup>」と書き加えている。ルターが贖宥状を問題にした『95カ条の論題』を提示したのが1517年である。その後の激しい争いがこのような加筆をエラスムスにさせたと考えられる。このいわゆる宗教改革が始まってから後のエラスムスの聖職者に対する態度についての考察は今後の課題としたい。

## むすび

『痴愚礼讃』での批判が、司教、枢機卿、教皇、司祭とそれぞれの特色を生かした諷刺・揶揄によって行われているのに対して、「アルキビアデスのシレノス」における批判の特徴は、それら聖職者共通の、いわば制度的な問題点にも目を向けて論じているところにあるように思われる。つまりそれは霊的な指導者であるはずの聖職者が権力や富といった世俗の事柄と不可分の状態にあるということである。このことはヨーロッパ中世のキリスト教会が、地上にあるものはその土地の領主の財産であるというゲルマン法的な考え方の上に発展してきたことに深く関係している。この私有教会制においては、聖職者も世俗の領主が叙任し、教会も売買、遺贈、相続できる不動産の一つとなる。このような世俗的世界との関わりは封建社会と経済の発展によって教会を豊かにもしたが、聖職売買や畜妾司祭さらに縁故者起用などの聖職者の腐敗・墮落を常態化するようにもなった。エラスムスの時代には貨幣経済の勃興や都市の発展による人口流出、戦争による荒廃などによって、土地からの収入に経済基盤を持つ教会は危機的状況にあり、多くの聖職者たちは信者を指導することよりも所有地経営を優先するような状況にあった。

このような問題について、教義的な論争ではなく、格言の解説といった文学作品の中で批判を展開するやり方がエラスムスの人文主義的方法といえるだろう。抜本的な改革を求めるといふよりは、聖職者の墮落と聖書の記述を照らし合わせ、より良くあるように勧めるのである。しかし聖職者たちの現状と使徒的理想の間はあまりにかけ離れている。その間にエラスムスは異教の哲学者たちを持ち出してくる。

ストア派の人たちは、精神の病を持っては、善い人であることはできないと言っています。彼らが精神の病と呼んでいるのは欲望や感情です。キリスト教徒であるなら、なおさらこれらから自由でなければなりません。そしてすべての人の中で君主は最もそれらから自由であり、とりわけ、教会の君主であり父である人は、より一層、自由でなければなりません。<sup>49)</sup>

他にもデモクリトスやヘラクレイトス、キュニコス学派のディオゲネスやクラテスが富を蔑んでいたと引き合いに出している<sup>50)</sup>。またはじめのほうに描かれたソクラテスの姿も、それと並べてキリストが描かれていることは、異教徒であっても学ぶべきものがあるということだろう。しかしながら引用中にも簡単に示したように、異教のもの (ethnica) をキリスト教と混ぜてはならないともエラスムスは言っている。ここでいわれているのは、戦争の勝利やこの世での栄華といったものは異教世界で尊ばれるものであって、キリスト教徒にとっては蔑むべきものだ、ということだろう。すでに若い時期の『反蛮族論』で異教徒によって創造されたものに、キリスト教徒にふさわしいものとそうでないものの区別をつけることが説かれていたことは第1.2節でみたとおりである。このように古代の文化の中から、キリスト教信仰に資するものを選び学んでいこうとする姿勢はキリスト教的人文主義とも呼ばれている。そして見た目は滑稽でも内側に美しい像を秘めている「アルキビアデスのシレノス」を用いて、内面的な信仰を強調し、その裏返しとして、聖職者たちの信仰の形骸化を描き出す手法もその精華といえることができるだろう。

本稿は注で示した他に最後にまとめた文献に多くを負っている。記して謝意を表したい。

注

- 1) 「エラスムスの聖職者批判（1）——聖職者エラスムス——」『東洋哲学研究所紀要』第20号（2004年）
- 2) Erasmus, *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed. P.S.Allen, H.M.Allen and H. W.Garrod (Oxford: Clarendon Press, 1906-1956) vol.1 p.99（以下Allen I p.99のように略記する）
- 3) Allen I p.107
- 4) Allen I p.115
- 5) Allen IV p.279
- 6) Tracy, James D. , “‘Against the Barbarians’ : The Young Erasmus and His Humanist Contemporaries” *Sixteen Century Journal* vol.11 no.1 (spring 1980) p.3 note.2
- 7) Rabil, Jr., Albert “Desiderius Erasmus” in *Renaissance Humanism: Foundations, Forms, and Legacy* vol.2 ed. by Rabil, Jr., Albert (Philadelphia 1988) pp.220-221
- 8) Erasmus, *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami* I,1 (North-Holland Publishing Company Amsterdam 1969) p.76 ll.2-11（76ページ2行目から11行目、以下ASD I,1, p.76,ll.2-11のように略記する）
- 9) ASD I,1, p.98,ll.14-16
- 10) ASD I,1, p.81,l.23-p.82,l.1
- 11) ヨハネスによる福音 12 : 32 『新約聖書』共同訳（講談社学術文庫,1994）p.324
- 12) ASD I,1, p.82,ll.17-23
- 13) 木ノ協悦郎「聖アウグスティヌスとエラスムス—異教古典の理解をめぐって—」『福岡女学院短期大学紀要18』1982年 pp.1-23
- 14) 金子晴勇訳『宗教改革著作集2』（教文館 1989） p.90 Erasmus, *Ausgewälte schriften Lateinisch und Deutch* Bd.1 übers., eingeleitet und mit Anm.vers.von Wernr Welzig (Darmstadt 1968 [1995]) p.208
- 15) 金子晴勇訳『宗教改革著作集2』（教文館 1989） p.80 Erasmus, *Ausgewälte schriften* Bd.1 (Darmstadt 1968 [1995]) p.188, p.200
- 16) 「エラスムスの聖職者批判（1）——聖職者エラスムス——」『東洋哲学研究所紀要』第20号（2004年） pp. (162) - (164)
- 17) Erasmus, *Ausgewälte schriften* Bd.1 (Darmstadt 1968 [1995]) p.370
- 18) 本節は拙稿「エラスムス「ドルピウス宛書簡」執筆の背景」『創価大学人文論集』第17号（平成17年3月）の一部と「エラスムス『格言集』から「ヘラクレスの難業」

翻訳と解題』『創価大学人文論集』第20号（平成20年3月）の一部を再構成して加筆したものである。

- 19) ASD II, 5 (North-Holland Publishing Company Amsterdam 1981) p.37 1.390
- 20) Duhamel, P.A. 'The Oxford Lectures of John Colet' *The Journal of the History of Ideas* 14 (1953) p.493-510
- 21) Allen I p.247 Ep.108 to John Colet
- 22) Allen I p.248
- 23) Gleason, J. B. *John Colet* (Univ. of California Press 1989) pp.58-59
- 24) Allen II p.257 Ep.423 from John Colet (1516年6月20日)
- 25) Allen I p.285, p.288, p.321
- 26) Allen II p.94 大出晃 訳『痴愚礼讃』（慶応義塾大学出版会 2004年） p.219
- 27) プラトン『饗宴』215a-b, 216d-217a
- 28) ASD II, 5 pp.159-160
- 29) ASD II, 5 p.162 ll.38-43
- 30) ASD II, 5 p.164 ll.67-68
- 31) ASD II, 5 p.168 l.199 - p.170 l.206
- 32) ASD II, 5 p.174 ll.298-311, ll.317-318
- 33) ASD II, 5 p.176 ll.353-354
- 34) ASD II, 5 p.178 ll.366-370
- 35) ASD II, 5 p.178 ll.397-398
- 36) ASD II, 5 p.180 ll.427-430
- 37) ASD II, 5 p.180 ll.402-418
- 38) ASD II, 5 p.180 ll.400-401
- 39) ASD II, 5 p.184 ll.502-506, p.184 l.511 - p.186 l.522
- 40) ASD II, 5 p.186 ll.562 - p.187 l.566
- 41) ASD II, 5 p.186 ll.543-563
- 42) ASD II, 5 p.188 ll.577-578
- 43) ASD II, 5 p.184 ll.496-498
- 44) ASD II, 5 p.174 ll.292-298
- 45) 金子晴勇訳『宗教改革著作集 2』（教文館 1989） pp.192-196 Erasmus, *Ausgewählte Schriften* Bd.1 (Darmstadt 1968 [1995]) pp.20-28
- 46) ASD II, 5 p.178 ll.373-376
- 47) ASD II, 5 p.188 ll.584-589
- 48) ASD II, 5 p.188 l.586
- 49) ASD II, 5 p.178 ll.391-394
- 50) ASD II, 5 p.184 ll.486-488



その他の参考文献

- Erasmus. *Collected Works of Erasmus* vol.1=CWE vol.1 *Correspondence* 1 letter 1 to 141 (A.D.1484-1500) tr. R. A. B. Mynors and D. F. S. Thomson and annotated by Wallace W. Ferguson (Univ. of Toronto Press 1974)
- Erasmus. *CWE* vol.2 *Correspondence* 2, letter 142 to 297 (1501-1514) tr. R. A. B. Mynors and D. F. S. Thomson and annotated by Wallace W. Ferguson (Univ. of Toronto Press 1975)
- Erasmus. *Collected Works of Erasmus* vol. 34 tr. and annot. by R. A. B. Mynors (Univ. of Toronto Press 1992)
- Erasmus. *The Adages of Erasmus* ed. by W. Barker (Univ. of Toronto Press 2001)
- Augustijn, Counelis *Erasmus: His Life, Works and Influence*, tr. J.C.Grayson (1986 University of Toronto, 1991)
- Schoeck, R.J. *Erasmus of Europe: The Making of a Humanist 1467-1500* (Edinburgh University Press, 1990)
- *Erasmus of Europe: The Prince of Humanists 1501-1536* (Edinburgh University Press, 1993)
- 月村辰雄「エラスムス」,伊藤博明編『哲学の歴史第四巻ルネサンス』（中央公論新社 2007）所収
- 二宮 敬『エラスムス』人類の知的遺産 23（講談社 1984）
- M.D.ノウルズ他『キリスト教史 3 中世キリスト教の成立』上智大学中世思想研究所編訳（講談社1981年）
- H.テュヒレ他『キリスト教史 5 信仰分裂の時代』上智大学中世思想研究所編訳（講談社1981年）

（やぎぬま まさひろ・委嘱研究員）

## Erasmus's Criticism against the Clergy (2): 'The Sileni of Alcibiades'

Masahiro Yaginuma

Satires against the clergy in *The Praise of Folly* are well known but we can find more direct expressions in 'The Sileni of Alcibiades' of the *Adages*. This essay on an adage written in 1515 shows us Erasmus's attitude towards the Church in the eve of the Reformation. The Silenus is a small wooden figure that is ugly outside but has a beautiful image of gods inside. Erasmus uses this figure to praise Socrates as Alcibiades does in Plato's *Symposium* and he praises Christ and the Apostles, too, as the greater Silenus, which becomes also a symbol of inner piety.

Erasmus described the clergyman as Silenus inside-out and saw in the ecclesiastic a warrior, a merchant and a despot, and he contrasted them with the apostolic ideals in the Bible. However, Erasmus did not want radical changes from the clergy but hoped they would be better.

The way Erasmus displays his criticism in a commentary on an adage which has allegorical meanings, occasionally referring to pagan philosophers, is the quintessence of his Humanism.